

いじめ問題への対応の要諦 ⑨

「言葉の力」を生かす

令和3年度の「問題行動調査（以下、「調査」という。）の結果によれば、「いじめの様態」として最も多いのは「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」（全認知件数中、小学校79%、中学校57%）です。これらは**全て言葉によるいじめ**です。



「寸鉄人を刺す」と言います。

「寸鉄」とは短い刃物、ここでは「短い言葉」のこと。「たとえ短い言葉であっても、人の急所をつく」という意味です。言葉にはこうした**「負の力」**があることを、発達段階に即して子どもたちに教えることが必要です。

言葉には、**四つの力**があります。**「考える」「感じる」「想像する」「表す」**力です。学校の全教育活動を通して、子どもたちに「言葉の力」を育み、日々の学校生活で主体的に生かすよう指導することが肝要です。

一方、教師も自らの「言葉の力」を十分に生かして指導に当たることが、いじめ問題の防止・解決に欠かせません。

- ◆ **考える……子どもが共感し、意欲を高める言葉がけを工夫する。**
- ◆ **感じる……子どもの気持ちを感じ取り、共感する。**
- ◆ **想像する……子どもの表情や態度から、言外の思いを察する。**
- ◆ **表す……よい点や進歩の状況を分かりやすく伝える。**

当事者

日本マクドナルド創業者 藤田田

傍観者ではダメである。どんな仕事でも、当事者になることが肝心である。

出典：「賢人たちに学ぶ 自分を超越する言葉」 本田季伸著（かんき出版）

※ 傍観者と当事者の違いは、責任感・使命感の有無にあります。